

患者と患児と患児の保護者のための 「親と子のとしょかん」整備について

中村雅子

大阪府立母子保健総合医療センター図書館

[経過]大阪府立母子保健総合医療センター図書館(以下、阪府母という。)の蔵書の構築は、1974年11月の大阪府衛生対策審議会からの答申を得た時点を起点とし、1980年4月の大阪府立助産婦学院(以下学院という。1997年3月閉院)1981年周産期部門、1987年口腔外科、1991年小児医療部門、研究所、などの開設に即して進められてきた。「図書館の利用対象は職員のみ。学術情報を主とし一般書は収集しない。」との方針は、1982年の図書委員会発足以来、2006年の現在も変わらない。

[司書の構想と現実]1982年着任する以前の司書の構想には、「医療専門職・一般職が利用する図書館を、患者を含む一般の人が利用できるように。」というものであった。その着想は、自身の図書館体験と公共の児童図書館・学院の勤務、妊産婦としての通院・入院体験から自然に得たもので、当時学院の講師だった病院産科部長と語りあった夢でもあったのだが、臨床経験のある学院第一期生の助産師からは「病院の図書館には何も期待していない。」と一蹴された。着任後は司書でありながら、非常勤という理由で図書委員会の委員でもなく、上司の事務職員に許可をもらいつつ、仕事をこなしていくだけの日々だった。公共図書館から病棟・外来用に団体借用を受けようとの、司書を含む有志によるささやかな試みも「任意の私的活動の範囲、ボランティアで」との圧力に断念せざるをえなかった。

[転機]2000年、「チャイルドライフ」環境整備を目指すワーキング活動がはじまった。発足時、司書に声掛けがあったが、「ボランティアとして児童書の提供に参加して欲しい」との意図には賛同しかね、「職務としてなら参画する」と返答したのみだった。メンバーは入れ替わったが、その活動は、2004年病院ボランティア活動の推進、クリニック라운の誘致、2005年1月児童書購入、2005年5月ボランティア控え室設置、2006年3月健康書購入、2006年4月チャイルドライフスペシャリストの採用へと繋がっている。

[児童書・健康書]開院以来、自然発生的に蓄積されてきた各病棟の児童書の管理を図書館で行えないか、との要望に応じたのが、2005年1月の児童書購入だった。装備済みで購入した1100冊の児童書群の名称を「親と子のとしょかん」蔵書として図書館に置き、病棟書棚との入れ替えは看護部病棟ワーキンググループのメンバーがあたることになった。そのワーキングには、正式に司書が参加し、新たに運用ルールを作った。2006年2月、「児童書と、それとは別に大人の患者・患児の保護者に利用してもらう医学・健康書を整備する」との指示が司書に出た。各診療科部長・看護部病棟ワーキンググループから購入推薦図書を募り司書が選書したものと併せて発注。児童書・健康書の最終的な冊数は約1200冊になる予定。しかし、同時期に提出した健康書運用ルールの司書案は、2人の上司によって即座に却下され、施設上層部へは伝えられていない。

[今後]2004年日本医療機能評価機構からの認定を受ける過程の中で、図書館の重要性、存在意義を施設上層部に再認識させることができた。だからこそ、さまざまな立場のそれぞれの思惑を交絡させながら、児童書・健康書の図書館の関与に、期待が増してきている。25年前に描いた夢のような構想を、実現できる時代によりやく到達した感がある。本年2006年4月から、当施設を含めた大阪府立の5病院は、地方独立行政法人化され、大きな不安を抱えながらも前年度までの事業を継続・発展していくことになっている。